

[038_1997]第三十八回中央図書館貴重文物展観目録
： 中世の博多と東アジア ： 文書・絵画・考古資料展

九州大学附属図書館中央図書館

佐伯, 弘次
九州大学文学部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/1485025>

出版情報 : 大学広報. 868, pp.11-20, 1997-04-30. The Committee of Public Relations Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

開学記念貴重文物展観

「中世の博多と東アジア」

—文書・絵図・考古資料展—

(中央図書館)

中央図書館では、開学記念貴重文物展観(第38回中央図書館貴重文物展観)を標記のとおり実施します。

展観資料の選定、解説、配列につきましては、文学部 佐伯弘次助教授をはじめ関係の方々にご尽力をいただきました。

主要展観資料の解説

古代・中世の博多は日本最大の貿易港であった。ある時期には日本で唯一の貿易港といってもよい存在であった。16世紀の半ば、ヨーロッパ人が来航するまで、中世日本の外交・貿易の相手国は、中国・朝鮮(高麗)・琉球・東南アジアなどのアジアの諸国であった。特にその中心は、中国・朝鮮(高麗)・琉球といった東アジアの諸国である。博多は、長く東アジアへの窓口であったのである。

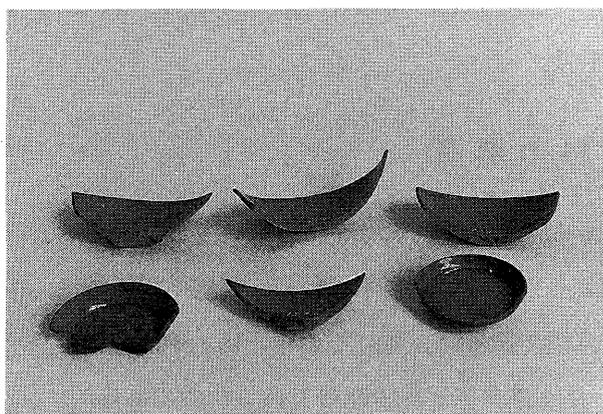
博多が初めて歴史書に登場するのは、8世紀半ばであるが、11世紀代にはすでに都市化していた。最近の発掘成果によると、11世紀半ばが都市化の大きな画期であるとされている。その発展の主要な要因は、博多が日宋貿易の主要貿易港となったことにある。日宋貿易の拠点となった博多には、宋商人が集住するようになり、「大唐街」という中国人街が形成された。13世紀後半には、2度にわたる元の襲来があり、大きな打撃をうけたが、その後日元貿易の貿易港として復活した。15世紀になると、博多商人は明や朝鮮・琉球との貿易を活発に行った。琉球・東南アジアの船も博多に多く来航した。博多は、この時代、環シナ海世界の重要な貿易港となっていたのである。

九州大学は大量の歴史資料を所蔵している。今回、それらの中から、中世の博多と東アジアとの関係に関する資料を集めてみた。中央図書館・六本松分館・文学部・法学部・比較社会文化研究科九州文化史資料室(九州文化史研究所)の各部局の所蔵資料の中から、古文書(書籍を含む)・絵図・考古資料を中心に展示を構成した。それは必ずしも関係資料を網羅したものではなく、また同時代の現物資料ばかりでもない。しかし、この展示品から、中世における博多と東アジアとの密接な関係、さらには中世日本とアジア諸国との多様な交流のあり方を読みとることが可能である。

I 中世前期の博多と東アジア

1. 博多港底発見中国陶磁器

六本松分館玉泉館資料。博多港底より発見された中国陶磁器。この内6点は、九州帝国大学医学部教授中山平次郎氏より、旧制福岡高等学校歴史地理参考室（玉泉館の前身）に寄贈されたものである。全て青磁の碗と皿である。中国浙江省の龍泉窯系の青磁が多いが、一部福建省同安窯系の青磁がまじる。時代的には、12世紀中頃から13世紀前半にかけてのものと13世紀代のものにわかれる。後者は外面に鎬（しのぎ）蓮弁文があるのが特徴である。いずれも海揚げりの陶磁器とは思えないほど表面に光沢がある。



中山平次郎氏寄贈の陶磁器



中国龍泉窯の青磁碗

2. 「渡宋記」複製本

永保2年（1082）に入宋した僧戒覚の渡航記録。1巻。寛喜元年（1229）に慶政が書写したもの。原本は宮内庁書陵部蔵（九条家旧蔵本）。この記録によると、永保2年9月5日、戒覚は弟子2人と博多で宋商人劉琨の船に乗船した。しかし朝廷の許可を得た渡航ではなかったため、発見を恐れて船底に隠れ、博多を出航するまでは飲食もできなかったという逸話が記されている。

3. 「散木奇詞集」

源俊頼（1055 - 1129）の歌集。群書類従本。大治3年（1128）ごろの成立という。俊頼は、父経信が嘉保2年（1095）大宰権帥として大宰府に下向したとき同行し、承德元年（1097）の父の死後、上洛した。したがって本和歌集には九州で詠んだ和歌も収められている。巻6悲歎部には、父経信が大宰府で死去した時に詠んだ和歌があり、その詞書に「はかた（博多）にはへりける唐人ともものあまたまうてきてとふらひけるによめる」とある。博多に当時多数の唐人（宋人）が居住していたこと、および日宋貿易に従事する博多の宋商が、貿易を管轄する大宰府の有力者と結びついていたことがわかる。

4. 「今昔物語」巻26

平安時代末期の説話集。写本。本朝世俗部の巻26第16に「鎮西貞重従者於淀買玉語」という説話が

ある。「筑前国の貞重が京都の藤原頼通等への贈り物として唐人（宋人）の船頭から絹六、七千匹を借用し、そのかたとして貞重は太刀10腰を預けた。帰途、従者が淀で真珠の玉を買い、唐人（宋人）がこれを切望し、結局、かたにした太刀と交換する」という内容。貞重は秦定重という実在の人物で、管崎宮の神主で、大宰府の府官でもあったと考えられている。大宰府・管崎宮と宋商人の関係を象徴する説話である。

5. 「宗像宮境内石経記」

六本松分館檜垣文庫。写本1冊。内題は「田島石経記」といい、文化14年（1817）梶原士敬著。文政3年（1820）写。宗像神社に現存する「阿弥陀経石」の調査記録。経石を写し、銘文を書写し、関係資料を示して考察を加える。この阿弥陀経石は大宋紹熙6年（1195）の銘を有することから、南宋から移入されたという説が有力である。承久2年（1220）の追刻銘には、宗像大宮司夫人であった「王氏」「張氏」の名が見え、宗像氏と宋商人の通婚関係が知られる。「江藤正澄雑纂」（中央図書館）巻2にも、「田島石経記」の写がある。

6. 「本州編稔略」

広瀬文庫（私立福岡図書館旧蔵資料）。享保8年（1723）藤定房編。写本3冊。鈴木棠三編『対州編年略』（対馬叢書、東京堂出版、1972年）の底本となった東京大学史料編纂所の謄写本の親本と考えられる。神代から元禄年間までの対馬の歴史を編年体でまとめたもの。本書に収められた建久6年（1195）5月5日「御神宝料物内京進并博多交易算用目録」は、日宋貿易との関係で早くから注目されていた。「博多交易物」には、絹織物や染料など、日宋貿易によって博多にもたらされた物が多く含まれている。

7. 「大槐秘抄」

平安時代末期、太政大臣藤原伊通が記した天皇の心得に関する意見書。写本1冊。中に「鎮西ハ敵国の人けふいまにあつまる国なり、日本人ハ対馬の国人高麗にこそ渡候なれ、其も宋人の日本に渡体ハにぬかたにて、希有の商人のたゝわつかに物もちてわたるにこそ候めれ、いかにあなつらはしく候らむ」という記述があり、当時の上級貴族の鎮西（九州）観や対外観を知ることができる。

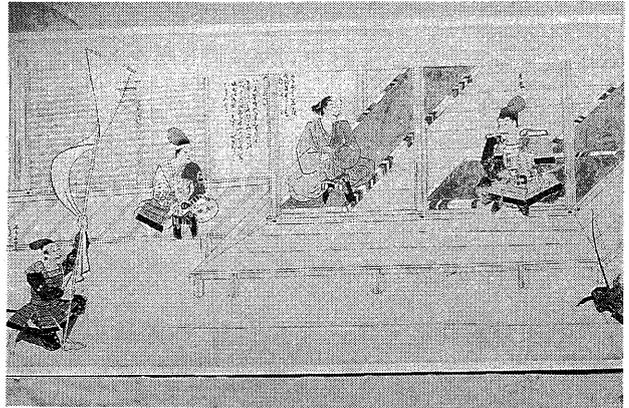
8. 「百練抄」

文学部国史学研究室。鎌倉中期に成立した編者未詳の編年史。嘉元2年（1304）に金沢貞頭が書写校合した金沢文庫本が諸本の祖本となっているが、金沢文庫本は現在伝わらない。本書は、『国史大系』の校訂に使用された旧宮崎文庫本（神宮文庫本）と同様、金沢文庫本を影写風に模写した写本である。対外関係の記事も豊富である。安貞元年（1227）、大宰府の鎮西奉行武藤資頼が、朝廷に上奏せず、高麗国使の面前で対馬国の悪徒90人を斬首し、ひそかに返牒を高麗に送って、「我国之恥也」と非難された記事はとくに有名である（安貞元年7月21日条）。

II 蒙古襲来と博多

9. 「蒙古襲来絵詞」九大本

肥後国御家人竹崎季長が文永・弘安の役でのみずからの活躍を描かせた絵巻物。原本は宮内庁蔵（御物本）。詞に永仁元年（1293）2月9日の日付があるが、いわゆる未来年号であるため、成立時期については諸説がある。鎌倉後期の成立という説が有力。九大本は上下2巻の近世後期の模本で、「蒙古襲来画卷物」の標題がついている。肥後阿蘇宮本の写であり、御物本の文字



「蒙古襲来絵詞」（九大本）下巻冒頭

の欠落部分が判読できる箇所があることで知られる。御物本とは配列が異なる部分がある。その配列のあり方から、松平定信が模写させた楽翁本と同一系統の模本であることがわかる。

10. 「参考蒙古入寇記」

宝暦戊寅（8年＝1758）、津田元願・元貫父子の編。5巻4冊の写本。「蒙古入寇記」ともいう。日本・朝鮮・中国の諸本から蒙古襲来関係の記事を抽出し、解説を加えたもの。津田父子は博多の人。「石城志」の編者としても知られる。元願の序文には、5・6歳の時、老人から、昔「ムクリ・コクリ」の鬼が博多を攻めてきたことを聞き、このことを事実と信じていたが、後年、書物でこれが虚誕であることを知り、本書の編纂を思い至ったと記されている。

11. 「博多日記」複製本

「楠木合戦注文・博多日記」（「正慶乱離志」）の後半部。原本は尊経閣文庫蔵。尊経閣叢刊の複製本（1936年）、1巻。「東福寺領肥前国彼杵庄重書目録」の裏を返して書かれている。「博多日記」は、東福寺の僧良覚が彼杵庄について鎮西探題で訴訟するため博多に下向中、見聞した出来事を記したもの。記事は正慶2年（1333）3月11日から始まっているが、惜しくも4月7日の途中で紙継ぎ目から欠落している。ちょうど鎌倉幕府＝鎮西探題の滅亡の時期に当たり、菊池武時の挙兵によって博多が戦乱に巻き込まれる様が克明に記されている。この記録は、明治21年（1888）、修史局の久米邦武によって博多にもたらされ（江藤正澄「筑紫雜纂」巻5）、明治23年刊行の「石城遺聞」に収録された。

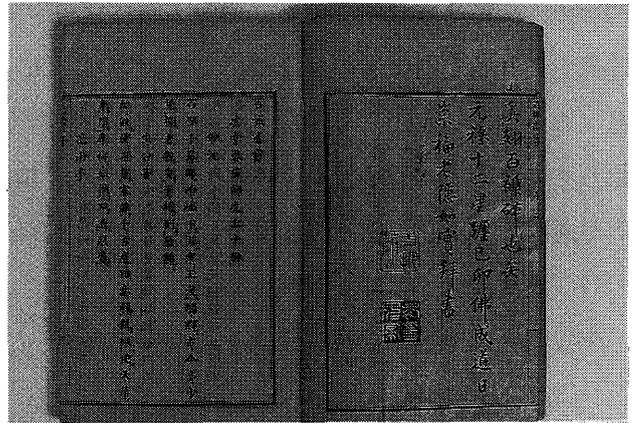
12. 「隣交徴書」

萩野文庫。中国の漢籍から日本関係の詩文を集めたもの。編者は豊前の伊藤松。一説に豊後の人ともいう。天保9年（1838）から同11年にかけて上梓された版本。3篇6冊。魏から清代の詩文が多数収録されており、対外関係史料として注目される。二篇一に収める宋代の禅僧無準師範の「答円爾長老書」は、師範が博多承天寺や京都東福寺の開山・円爾に宛てた墨跡である。これには、博多綱首謝国明が火災で消失した中国の径山に材木千板を送ったことが記されている。

Ⅲ 中世後期の博多と東アジア

13. 「石城遺宝」

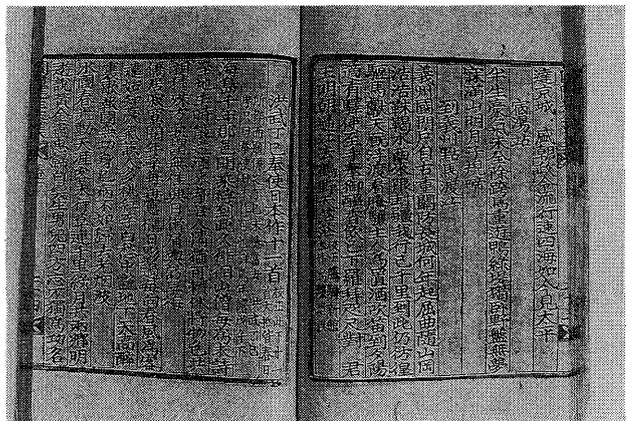
博多妙楽寺住持紹宙性宗が崇福寺僧紹庸と相語らい、妙楽寺に伝わる「虎丘十詠」などの詩文を集成したもの。元禄13年(1700)刊。1冊。「虎丘十詠」は、南宋の禅僧虚堂智愚が中国虎丘山の名所10カ所を漢詩に詠んだもの。これに13人の中国・日本の禅僧が跋を加えている。これによってこの十詠が日本に伝わり博多妙楽寺に所蔵されるようになった経緯がわかる。「虎丘十詠」はその後、寺外に流出し、本文と跋文が切断されて今日に伝来している。したがってこの十詠の本来の形は本書でしかわからない。本文はMOA美術館の所蔵となっている。このほか明の見心来復が記した「石城山吞碧楼記」、多数の日中禅僧の漢詩を集めた「吞碧楼題詠」などを収めており、中世の博多妙楽寺を拠点とする日中文化交流の具体相が明らかになる。国内にほとんど伝来しない稀観本である。



「石城遺宝」

14. 「圃隱先生文集」

六本松分館(旧制福岡高等学校図書)。朝鮮本(重刊本)、5冊。高麗末期の政治家鄭夢周(圃隱)の詩文を集めたもの。鄭夢周は使節として中国や日本に派遣された。特に洪武10年(1377)に倭寇の禁圧を求めて来日し、九州探題今川了俊と博多で対面し、厚遇された。翌年帰国したが、了俊は使者を同行させ、倭寇が連れ去った被虜人数百名を送還した。本文集には、この時の来日中おそらくは博多で詠んだ漢詩11首を収めている。大正13年(1924)、京畿道知事時実秋穂が鄭夢周の宗孫から本書の寄贈を受け、時実はこれを昭和9年(1934)に福岡高等学校に寄贈した。



「圃隱先生文集」巻1

15. 「言塵集」

音無文庫。7巻5冊の版本。承応3年(1654)刊。南北朝期の武将今川了俊の歌学書。応永13年(1406)成立。巻6で「三くわの酒」という高麗の酒について言及している。この酒は「酒をせんして其いきをしつくてうけて、それを三度までせんしかへしへてためたる酒」すなわち蒸留酒であり、

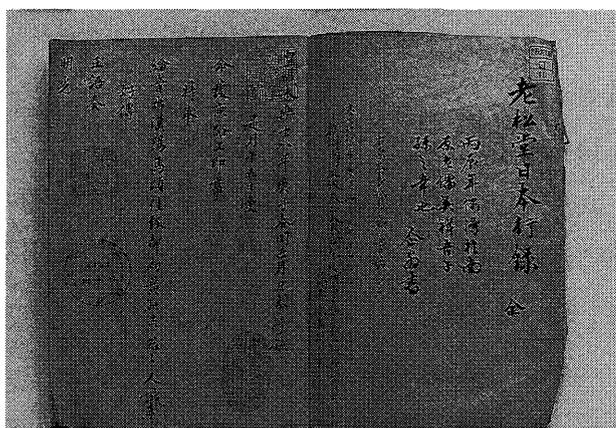
九州で高麗から送ってきたものを呑んだとのべている。了俊は鄭夢周の来日に際し、肥後の戦陣から博多に帰還しており、この「三くわの酒」は鄭夢周が了俊に贈ったものかもしれない。それは「一盃のミてぬれは七日酔」というほど強烈な酒であった。

16. 「善隣国宝記」

萩野文庫。文明2年(1470)、禅僧瑞溪周鳳が神代から室町時代までの日本と外国との交渉の事績や外交文書を編纂したもの。明暦3年(1657)の跋文を有する覆刻本。3冊。上巻では日本と東アジア諸国との外交史を編年的に記し、中・下巻には明・朝鮮との外交文書と別幅を収める。室町時代の対外関係史の基本史料である。巻中の瑞溪の跋に、「応永の初め(応永元年は1394年)、「筑紫商客」の肥富(こいづみ)が明より帰国し、足利義満に日明両国通信の利を説いたので、義満は肥富を使者に任命して明と初めて通交した」と記されている。「筑紫商客(九州商人の意)」の肥富は博多商人とするのが通説である。日明貿易のきっかけを作ったのは博多商人であった。

17. 京城帝国大学本「李朝実録」

李氏朝鮮の歴史を歴代国王ごとに編纂したものの。「朝鮮王朝実録」ともいう。本書は、京城帝国大学が太白山史庫本(一部江華史庫本)を底本とし、昭和5年(1930)から同8年(1933)までに刊行した影印本。30部刊行で計888冊。戦後、学習院大学や韓国国史編纂委員会からこれをもとに縮刷版が刊行された。中世後期の博多関係史料は国内にはそれほど多く残存していない。博多商人や博多関係の大名の朝鮮通交の記事を多数収録する「李朝実録」は、室町時代の博多の基本史料の一つといえる。



「老松堂日本行録」萩野文庫本

18. 「老松堂日本行録」

萩野文庫。写本1冊。応永27年(1420)回礼使として来日した朝鮮の官人宋希環の紀行詩文集。東京帝国大学教授萩野由之が大正3年(1914)小牧昌業から借用した古写本(小牧本、現在は所蔵者がかわり、井上本という)を影写したもの。昭和8年(1933)に刊行された『校注老松堂日本行録』(大洋社)の校訂にも使用され、萩野文庫本として古くから学界でも著名であった。宋希環は京都への往路と復路二度にわたり博多に滞在し、九州探題渋川氏や博多商人・僧侶らに歓待された。渋川氏支配下の博多史料としても貴重なものである。

19. 「海東諸国紀」朝鮮史料叢刊本

朝鮮の領議政(首相)をつとめた申叔舟が1471年(日本の文明3年)王命によって編纂した日本・

琉球に関する書物。両国の歴史・風俗・地理・朝鮮との関係などが記され、地図を収録する。室町時代の日本・琉球に関する好史料でもある。本書は、昭和8年(1933)朝鮮総督府朝鮮史編修会が朝鮮史料叢刊第二として、対馬宗家に伝来した古活字本(現韓国国史編纂委員会所蔵)を影印したもの。博多についても、「居民万余戸、小二殿と大友殿分治す、(中略)居人行商を業とす、琉球・南蛮の商船所集の地なり」と記し、道安・宗家茂など博多の貿易商人の名前を記している。

20. 「海東諸国紀」写本

萩野文庫。写本1冊。「海東諸国紀」の朝鮮古版本は、東京大学史料編纂所(曲直瀬家旧蔵)・内閣文庫(豊後佐伯藩主毛利家旧蔵)・韓国国史編纂委員会(対馬藩主宗家旧蔵)・南波松太郎氏(北京傳増湘氏旧蔵)の4本が知られている。写本についてはまだ調査が十分ではなく、所在のリストさえ作成されていない状況である。近世の歴史書や地誌類をみると、「海東諸国紀」を引用した書物が多く、多くの写本が存在していたと考えられる。この萩野文庫本は、享保10年(1725)の東海平維章の跋文がある写本を、明和2年(1765)に近江藤仲胤繕が写したものである。版本にある地図が写されていない点に特色がある。なお文学部国語国文学研究室にも近世の写本がある。

21. 「保閑齋集」

「海東諸国紀」を編纂した朝鮮の申叔舟(1417~1475)の詩文集。朝鮮総督府朝鮮史編修会が昭和12年(1937)朝鮮史料叢刊第十四として影印刊行したもの。稲葉岩吉氏所蔵の仁祖時代の覆刻本が底本。補遺・目次解説を含めて8冊。申叔舟は世宗25年(1443)に朝鮮通信使一行の書状官として来日した。このとき、「博多島」で博多の人物と漢詩の贈答を行ったことが本書に記されている。このほか申叔舟は、漢陽(ソウル)に上京した日本人使節とも交流があり、例えば「題日本国僧寿蘭詩軸」という詩文も収められている。

22. 「来島文書」室町幕府奉行人連署奉書2通

文学部国史学研究室。来島文書は、中世肥前的山(あづち)大島の領主大島氏の家文書。鎌倉初期から近世初期まで計41通ある。大島氏は南北朝時代に松浦党の一員となり、朝鮮との貿易などで活躍し、近世には福岡藩士となり、来島と改姓した。2通の室町幕府発給文書が収められており、いずれも室町時代の遣明船派遣に関する文書である。文正元年(1466)6月19日の文書は、同年博多を出港した第12次遣明船が肥前呼子浦で風波の被害を受けた時、大島氏がその警固に奔走したことを賞したものの。遣明船派遣者の一人である大内政弘の感状もある。文明7年(1475)10月8日の文書は、第13次遣明船の警固を厳密に行うように大島氏に対して命じたもの。こうした遣明船の警固に関する古文書はほとんど残存せず、貴重なものである。

23. 「宗祇筑紫紀行」

六本松分館檜垣文庫。写本1冊。連歌師飯尾宗祇は、文明12年(1480)山口の大名大内政弘の招きで京都から北部九州に下向した。本書はその時の紀行文である。宗祇は山口から長門赤間関を経て豊

前門司に渡り、若松・木屋瀬・長尾を通り太宰府天満宮に参拝。その後、博多・箱崎・香椎・宗像・芦屋などを経て山口に到った。当時の博多の景観を「前に入海はるかにして、志賀の島をみわたして、沖には大船おほくかゝれり、もろこし人も乗りけんと見ゆ、左にハ夫となき山ともかさなり、右は箱崎の松原遠くつらなり、仏閣僧坊数もしらす、人民の上下門をならへ軒をあらそひて、その境四方に広し」と活写している。博多滞在中、宗祇は龍宮寺にて「博多百韻」と称される連歌を行った。山崎藤四郎編『石城遺聞』上巻(1890年刊)にはその全文が収められている。

24. 「聖福寺之絵図」

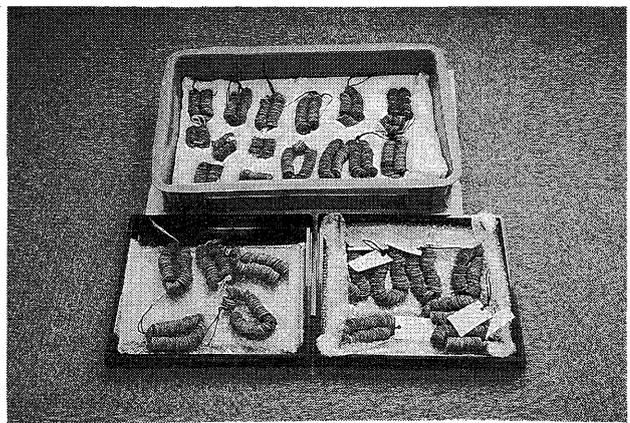
比較社会文化研究科九州文化史資料室。昭和10年(1935)博多聖福寺蔵の絵図を写したもの。1巻。原本は唯一の中世博多の絵図として著名。戦国時代の聖福寺住持耳峰玄熊が永禄6年(1563)の戦乱で紛失した絵図の残余を求めて修補したという墨書がある。したがって一部欠落がある。本図の作成年代は、1563年以前ということではできるが、それ以上の正確な年代は判明していない。聖福寺のほか、右手には承天寺、左手には寺内町・蓮池・博多の海岸を描く。海岸の砂浜では、石垣(13世紀後半に築造された元寇防塁とされる)の前で木材を加工する工人(船大工とされる)の姿が描かれる。絵の上方には堀と松原があり、まだ石堂川は開削されていない。本写図は、博多の海岸部が原本とは逆に接続されている。

25. 博多出土銭・外容器(備前焼壺)

六本松分館玉泉館史料。昭和32年(1957)7月24日、旧博多駅前ナショナルビル(博多駅前1丁目)横東隣の電報局前の道路改修中、地中から発見されたもの。銭は、発見当初6,7千枚あったとされるが、旧玉泉館の展示パネルによると3,883枚となっている。唐の開元通宝(621年初鑄)から明の宣徳通宝(1433年初鑄)まで、45種類の中国銭と1種類の朝鮮銭(朝鮮通宝3枚、1423年初鑄)が確認されている。もっとも多いのは明の永楽通宝(1408年初鑄)で、868枚ある。外容器の壺(高31.1cm)は備前焼の完形品で、16世紀初頭頃のものであるという。したがってこれ以降に地中に埋納されたものである。博多で発見された埋納銭としてはこれが最多の事例である。



備前焼壺と出土銭(一部)



出土銭

26. 「南海通記」

福岡藩の兵学者香西成資が編纂した四国の歴史書。写本21冊。寛文3年(1663)の成資の跋文と宝永2年(1705)の竹田定直の序文がある。巻6に天文16年(1547)2月20日の「大内家渡唐船中法度条々」を収める。本条々は、最後の遣明船である19次遣明船の船中ならびに明滞在中における入明者の行動について規定したもの。「日本人の成敗は大唐(明)の法度に任せる」「博奕などの勝負は禁止する」「銅銭を大唐に持参してはならない」など、計28条の条文からなる。遣明使節の一行は、天文16年2月21日に山口を出発し、3月3日に博多に到着しているの(「大明譜」)、山口を発つ直前に大内氏から発布されたことがわかる。本条々は原本が伝来せず、本書によってのみしか知ることができない。

27. 「日本一鑑」

法学部。明の鄭舜功が滞日経験に基づき、嘉靖44年(1565)に記した日本研究書。舜功は嘉靖34年(1555)から同36年(1557)まで明の使者として豊後大友氏のもとに滞在した。本書は民国28年(1939)に中国で刊行された影印本。5冊。「隴島新編」「窮河話海」「桴海図経」の3部構成で、日本の様々な分野に関する記述がある。とくに「窮河話海」にある日本語の記述は詳細で、国語史の資料として早くから注目されている。博多に関する記述も多く、博多を「通中国・朝鮮之要道」と記述している。

28. 「籌海図編」

文学部国史学研究室。嘉靖41年(1562)明の鄭若曾が倭寇からの海防のために編纂した日本及び倭寇に関する書物。本書は天啓重刻本であるが、全13巻のうち、巻2・5・7・9・11・12・13の計7巻しか存在しない。巻2の「日本考」に日本関係の記述が集中している。その記事の中身は、鄭若曾が前年に著した「日本図纂」とほぼ同内容であることが指摘されている。

29. 「異称日本伝」

萩野文庫。京都の松下見林が元禄元年(1688)に編纂した史料集。外国の書籍から日本関係の記事や詩文などを抽出し、集成した。元禄6年(1693)の刊本。15冊。上・中・下に分かれ、上・中は中国、下は朝鮮の書籍からの引用である。史料が博搜されており、今日の対外関係史研究にとっても有用である。例えば、中之五に収録された明末の「図書編」には、「日本国王の貢使は必ず博多より開洋し、五島を経て中国に入る。それは造船と水手がともに博多にあるからである」と記されている。

30. 「日本風土記」

萩野文庫。明の候継高が万暦20年(1592)に編纂した「全浙兵制考」の付録。著者は不詳。明末の日本研究書の一つ。本書は、大正4年(1915)珍書同好会叢書の1冊として刊行されたもの。5巻からなり、日本の地図や沿革・朝貢・風俗・日本語などについて記す。国語史の資料としても著名である。巻2の「商船所聚」には、日本三津の中津として花旭塔(博多)津を掲げ、十里松や大唐街の記事をの

せる。

31. 「釈天荊朝鮮国雜藁」

比較社会文化研究科九州文化史料室長沼文庫。内題には「右武衛殿朝鮮渡海之雜藁」とある。加賀前田家本を明治21年(1888)に写した写本の転写本。天荊は天正6年(1578)に「右武衛殿」の使者として朝鮮に渡海した(漢陽着は翌年)人物であり、京都の妙心寺の僧侶と称している。本書はその日記である。この遣使の主体は、足利義昭・織田信長・渋川義明など諸説あるが、対馬の人物が偽作したという解釈が妥当である。本書によると、天荊は天正5年10月、官命を奉じて兵庫津を出発し、翌年9月に対馬に到着、11月5日に釜山に渡海したとある。対馬からの記事は詳細であるが、兵庫津から対馬府中までの記事は、「博多・壱州処々浦々あげて記すべからず」とほとんど省略されている。このアンバランスな記述ぶりも、この遣使の偽使説を裏付けている。

IV 近世資料にみる博多

中世の博多関係資料は地元にはあまり伝来しないため、近世の博多資料も中世の博多を知る上で重要である。紙幅の関係で資料名を掲げるのみにしたい。

近世初期の記録・史書としては、「宗湛日記」「豊前覚書」がある。

近世の筑前地方の地誌類はかなり豊富であり、中世博多の歴史を知る上で重要なものがある。「筑前国続風土記」「筑前早鑑」(末永虚舟自筆本)「筑前国中神仏宝物記」「石城志」「博多之記」「博多寺社古事録」「筑陽冷泉津古今聞書」「博多津櫛田神社記録」「筑前国続風土記拾遺」「太宰管内志」を展示する。

中世博多の地形や都市景観を復元する時、近世の絵図も有効性を発揮する場合がある。ここでは「福岡城下之絵図」(吉田家文書)「筑前城下之図」「博多古図」を展示する。